

# 賢治とネルヴァルー日仏の臨死体験の文学<sup>①</sup>

私 市 保 彦

今日のテーマは、臨死体験をモチーフとする日仏の二つの物語の対比ですが、その対比をするまさに、前提になる臨死体験について簡潔に説明しておきます。

臨死体験というと、とりわけ宗教的に、あるいは、いささかオカルト的に考えられる向きがありますが、周知のように、近年はシリアルスな問題として浮上しています。そのきっかけをつくったのが、アメリカの精神医学者ムーディーの『かいまた見た死後の世界』<sup>②</sup>という本です。邦訳は一九七七年刊ですが、原書は七五年に刊行され、アメリカで四百万部、全世界で一千万部売れるという大ベストセラーになりました。というのも、従来科学者からはタブー視されてきた死後の世界をとりあげたからです。ムーディーは、大学の学生の臨死体験を聞いて、その衝撃的な内容に驚き、その後百五十人ほどの体験者の例を集めて、そのうちの五十人ほどの例を紹介したのです。そこで浮かび上がってきたのは、多くの人が共通した体験をしていること、また、死後の世界はそんなに怖いところではないらしい、むしろその反対であって、臨死体験を経た人はみな、以後死ぬことが怖くなくなつた、また生き返つてからは、これか

らの人生をもつと眞面目に生き抜かねばならないという反応を共通して抱いた、ということです。

このムーディーの著書を、人が死ぬときのターミナル・ケアを唱えていた有名なキープラーラ・ロスなども評価して、アメリカでは臨死体験のまじめな研究が始まりました。臨死体験をいまだオカルト的に扱っている日本とは、違うところです。日本でも、立花隆という好奇心の塊のような人が関心をもつて、自分でも臨死体験の例を集めたり、アメリカに行ってムーディーや多くの研究者に会って、『臨死体験』という上下二巻の本を出しています。同時にテレビでもしきりに取り上げられ、副次的な現象として、チベットの『死者の書』などへの関心も高まってきたという現象になつたわけです。

ここで、本論に先立つて、ムーディーが描いた多くの人に共通している臨死体験のコア現象、あるいはコア経験といわれているモデルを紹介します。これは人によって、あるいは宗教によって、また国によってちがっていますが、ちがい以上に驚くほど共通している部分から成り立つていてことから、コア現象、あるいはコア体験と称しています。しかし、このコア現象も、アンケートの取り方や対象の人数は、調査した人によつてちがいます。ここでは、その一例として、立花隆の『臨死体験』に取り上げられているものを紹介します。ケネス・リングの調査によつていますが、それによると、まず人が死ぬときには、魂が肉体から離脱するという言い方に対応するかのように、人は自分の体をベッドの方から眺めているという体験をもちます。<sup>(4)</sup> いいかえれば、もうひとりの自分を見ているわけですから、精神医学で「<sup>オースコピ</sup>自体幻視」といわれている異常体験をしていくことになります。頻度では三七パーセントの人間に現れますから、かなりの確率です。さらに奇妙なのは、「トンネル現象」といつて、暗い狭い管のようなところを猛烈なスピードで通り抜け、そのときに不快な騒音を聞いているという体験が現れます。そのあとに、自分の一生の主な出来事が、フラッシュのように見えてくるいわゆる「パノラマ現象」を体験します。そして、大きな光が現れて、あたた

かい愛情でつつみこむようにして言葉にならぬ言葉を語りかける体験をもちます。最終段階ではあの世の境界のような川が現れることがあり、向岸には死んだ祖父母とか友などが現れ、こちらにくるなど手を振るそうです。この「追い返し」があると、たちまちベッドに寝て自分の戻るということになります。この「肉体への帰還」は、当然のことながら百パーセントの確率です。でなければ、生き返れませんから。

\* \* \*

以上の臨死体験を念頭においた上で、本題の賢治とネルヴァルに移ります。さて、今日の話は日仏の二つの物語をめぐるもので、二つの物語のあいだをピストンのように往復しますから、二つの物語の筋書きをからめながら話を進めます。とりわけ『オーレリア』は、広く読まれているとはいえないきわめて特異な作品なので、その特徴がわかるよう説明します。

まず、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』ですが、物語では主人公は死にかかったわけではありませんが、シナリオとしては臨死体験そのものです。つまり、主人公のジョバンニという少年がいつの間にか天の川に沿って走る銀河鉄道に乗っていて、そこまでに死んでいるカンパネルラと一緒に空の旅をして、また地上に戻ってくるからです。すぐれた『宮沢賢治論』を書いた吉川隆明は、『死の位相学』で、臨死体験という言葉は使っていませんが、死後の世界を描いたという文脈で『銀河鉄道の夜』を解説しています。<sup>(5)</sup>

一方、ネルヴァルの『オーレリア』では、すばり死後の世界とおぼしき他界への旅が描かれています。それについて述べる前に、そもそもネルヴァルとはどんな作家であるのか、『オーレリア』とはどんな物語であるのか説明しなければなりません。

著者のネルヴァルが有名になつたのは、十九歳の若さでゲーテの『ファウスト』をはじめて仏訳したからですが、

その後は詩人、小説家、劇作家として活動するようになりました。一方、実人生では、精神異常の発作をなんども引き起<sup>(1)</sup>こして、そのつど入院して治療を受け、多くの友人に心配をかけていました。しかし、人間としては限りなく誠実で優しく、「やさしきジエラール」といわれ、友人・知人に愛されていました。ところが一八五五年に、四十八歳の若さで死にました。それもパリのヴィエイユ<sup>(2)</sup>ランテルヌ街で縊死をとげるという異常な死に方です。そのときの目撃者がいなくて、検屍の記録も診断もパリコミュニーンの騒動で焼けて紛失したため、いまだに自殺説から他殺説まであります。あるいは、魂が抜け出る首の穴をマフラーでしっかりと縛つたために死んでしまったのであるという、不思議な説まであります。葬儀が自殺者の葬儀はしないというノートルダム寺院でいとなされましたことも、死因が決定的に決められなかつたことと関係がありそうです。

とにかく、ネルヴァルの死は周囲の人々に大きな衝撃をあたえました。当代の代表的な挿絵画家ギュスタフ・ドレは、ネルヴァルの死というダイナミックな版画を描いたほどです（図1）。ところで、『オーレリア』の刊年は一八五五年になつていますが、じつは第一部が「パリ評論」一月一日号に発表され、第二部は二月一五日に発表されています。そして、ネルヴァルが縊死を遂げたのはそのあいだの一月二十六日なのです。つまりネルヴァルは、この遺作で死後の世界の幻想を描いてから、自ら死の世界に赴いたわけですから、その意味でもドラマチックな作品といえます。ところがネルヴァルの死後、ネルヴァルはある意味では影が薄くなりました。それは、すでにレアリズムの時代に入り、フロベールの文学が出現して、ついでゾラなどの自然主義の時代がひかえていたという流れと関係があります。つまり、ネルヴァルのような内面の世界を追求したり、幻想を描く文学が見向きもされない時代になつてゆくのです。その間、世纪末のデカダンスの文学といった形の幻想文学の第二次黄金時代がおとずれますが、ここでも、ネルヴァル再興の顯著なきざしは見られず、ひたすら心の深層に沈む記憶を追い続けたブルーストが、ネルヴァルを発見し、



図1 ヴィエイユ=ランテルヌ街で縊死するネルヴァル (ギュスターヴ・ドレの石版画)

自分の文学の先駆者をネルヴァルに見ようとしたのは、一九世紀末から二〇世紀に入つてからです。それまでは、ラソソーン、ブルンチエールなどの代表的な文学史をはじめ、多くの文学史で無視され、下院で議員による質問も出たと  
いうことですから、愛読者には耐えられない状況があつたと思われます。<sup>(2)</sup>ただし、国会で取り上げられたのは、純粹  
に文学的な視野でなく、モーリス・バレスなどのナショナリズム文学の台頭が土着の伝承を喚起したネルヴァルの再  
評価を求めたというべつの流れと関連があるやも知れません。ところが、二十世紀になると、「ネルヴァル・ルネッサンス」<sup>(3)</sup>なる現象が起り、ネルヴァルは目覚ましい復活をとげ、一九一〇年代にアリスデッド・マリの伝記が発表  
され、ネルヴァルの研究と関心が深められ、ベガン、ジョルジュ・ブーレーといった大学者がネルヴァル論を書くよう  
になつて以来、今やネルヴァルはアカデミズムの世界で大きな研究テーマになつています。その意味では、賢治童話  
の本格的な評価と研究が戦後になつて盛んになつたという現象に似ていなわけではありません。

\* \* \*

『オーレリア』は、ネルヴァルがじつさい自分自身の精神発作から味わつた幻想体験をもとにした文学です。研究  
者の中には、もっぱらネルヴァルがブソキッシュに受けた、つまり文献学的な面ばかり強調する人がいますが、私は、  
そうであるにしても、『オーレリア』にみられる幻想の氾濫は個人的な体験がなければありえないものだと、思つて  
います。それほど、『オーレリア』のテキストには、情動的な力があるのです。

物語の主人公は、オーレリアという恋人と別れることとなつて大きな心の傷と罪の意識を負いながら生きているの  
ですが、その中で何度も精神的な発作を起こして、異常な夢や幻想に襲われます。冒頭は、「夢は第二の人生である。<sup>(4)</sup>  
われわれを見えない世界からへだてているこの象牙か角の門を、私は戦慄せずに通り抜けることができなかつた」<sup>(5)</sup>  
という有名な言葉で始まつていますが、『オーレリア』は夢によつてつづられた文学といつてよいくらい、夢の場面

が幾度もあらわれてきます。そのうち、ここで紹介するのは、最初の夢です。というのは、ここには典型的な臨死体験の幻想が描かれているからです。

その下りは第一部の第三章に表れます、主人公は道を歩いている内に、異常な興奮状態と妄想に襲われ、近くの兵営に運ばれて寝かされることになります。そして、友人が彼を引き取りに行くのですが、その有様を自分が隣のベッドで見ているのです。そして、私はここにいると叫んでも友人は一向に気づかずに主人公を連れ去つてゆくということになります。そこで、私は騒ぎたて、独房に放りこまれ、やがて精神病院にはいります。

この事件は、よく知られているように、一八四一年に実際ナルヴァルの身に起こった精神錯乱の発作にもとづいています。ここで注目したいのは、注<sup>(4)</sup>の口に列挙したコア体験に対応する、「自体幻視」が、主人公の身に起こっているということです。そして、「自体幻視」がこのようにリアルに描かれた文学は希です。もうひとりの自分が出現する自体幻視は、文学のモチーフとしては「分身」あるいは「ドツッペルゲンガー」として知られ、『ギルガメッシュ叙事詩』からはじまり、ナルヴァルが影響を受けたホフマンの『悪魔の靈液』をはじめヨーロッパの幻想文学ではしきりに描かれます。<sup>(1)</sup>しかし、『オーレリア』ほどリアルに描かれているのは希です。というのも、ホフマンの『悪魔の靈液』のように、じつは腹違いの兄弟だったというようなプロットとしての設定ではなく、内的な幻想・妄想であるからです。それを病理的に押しすすめると、ドストエフスキイの『分身』の世界になります。

ここで物語の章が変わり、本文一三六頁に引用する地下に落ち込む幻想を見ることになります。連続的になつていないととも、肉体離脱のあとに現れる「トンネル現象」で、それもかなり典型的な形で現れます。この描写の特徴はあとで述べますが、引用にあるように、暗いトンネルをぬけたあとにまばゆい光とともに、他界の世界が開けてきます。

そこで私は、ある老人に案内されてとある家の大広間にはいります。すると、そこには大勢の人が集まっています。

私は、たくさんの人々が集まっている広大な広間にはいった。いたるところ、顔見知りの人たちの姿を見えた。私が涙を流した亡き肉親の面影が、昔の服装をしたほかの人々に再現され、父と同じように私を迎えてくれるのだつた。<sup>(13)</sup>

という場面になります。つまり、ここは死者の世界であるということになります。その中に、ネルヴァルに大きな影響を残した死んだ母方の大伯父とおぼしき人が現れ、お前はまだ地上の人間だから、また地上に戻つて試練をうけねばならないという意味の言葉を私に伝えます。<sup>(14)</sup>ここには、「死者の出会い」と「追い返し」というコア体験があります。

ごく簡単にたどりましたが、『オーレリア』に現れたこの幻想場面は、このように様々な面で臨死体験に対応しています。ネルヴァルも、この物語の最後で、「私は眠りが休息だと感じたことはけつしてなかつた。数分の麻痺のあと、時間と空間の条件から解放され、おそらく死後にわれわれを待つてゐる生に似た新たな生がはじまるのだ」と述べているように、この夢を死後の世界の夢と見ていたのです。さらに、物語を締めくくることばとしては、「私は、私が経てきた一連の試練を、昔の人たちが『地獄下り』の概念を描いているものと比べて、古代からの『地獄下り』の原型に重ね合わせます。

ここでいわれている『地獄下り』とは、とりわけ、ダンテの『神曲』だと思われます。『神曲』は、ご存じのように、詩人ダンテが死んだ恋人のベアトリーチエを求めて、地獄から煉獄、天国へと探し求めてゆく話ですが、物語の

主人公の二度目の夢にも、すでに死んだオーレリアが現れるからです。彼もダンテと同様に、恋人の面影を求めて他界に旅立つたといえます。『神曲』では、詩人が永遠の愛人といわれたペアトリーチエを求めて、地獄から煉獄へとめぐり歩き、やがて天界にたどり着きます。しかし、ペアトリーチエは神の側にいて、まぶしくて見られないということがあります。しかし、詩人は女性の魂に導かれて、神に救済され、天国に入るのです。ここには、男と女は神を通して結ばれている、いわば男と女の関係は神を通して垂直的にも結ばれているという典型的にヨーロッパのキリスト教的なイデーがあります。

ネルヴァルの女性像は、オーレリアのモデルであるジエニー・コロンという実在の女優や、その他の昔あこがれた何人の女性がこめられていますが、その深層には、物心つく前に死んでしまった母親像があり、さらには、聖母マリア、異教の女神イシスを救済者として憧憬していたことがわかります。イシスが現れるのは、ローマのアプレイウスの『黄金のロバ』の影響ですが、『オーレリア』は、こうした原型的な女性像の憧憬と追求につらぬかれています。

\* \* \*

さて、『銀河鉄道の夜』も、死んだ妹の魂を求めての旅であるという解釈がなされています。また、カムパネルラのモデルは保坂嘉内ではないかという説も最近強くいわれています。<sup>[17]</sup>『銀河鉄道の夜』に妹の魂を求めての旅が描かれているにしても、また、汽車に乗っている女の子に妹の影を見る見方があるにせよ、賢治は異性とエロスを抑圧した人ですから、賢治の靈界への旅が、アニマを求めてのネルヴァルの「地獄下り」と同じ風景を見せるわけはありません。しかし、二つの作品には重なり合うところがいくつもあります。

まず、二つの物語の主人公には、外の世界になじめないという希薄な現実感があります。『銀河鉄道の夜』のジョバンニは、物語のはじめから内気な少年として登場します。母は病気で、父は北の海で密漁をしていると友達にいじ

められます。

ここで、『銀河鉄道の夜』の異稿、つまり四段階の書き直しについて、簡単にふれます。賢治の愛読者は知っていますが、『銀河鉄道の夜』は、四段階にわたる書き直しがあり、現在では、その四段階を、初形、第二次稿、第三次稿、終形と分けて、全集で編纂されています。それを読み比べると、書き直されるたびにジョバンニが意志的・自立的な少年になつていることがわかります。しかし私は、『銀河鉄道の夜』の特徴を全面的に理解するためには、この書き直しをべつべつに読んで評価するのではなく、一体として読む必要があると思っています。その点では、最近、賢治研究家の西田良子が、「『銀河鉄道の夜』を読む」<sup>(15)</sup>という著書で、四つのテキストを上下二段の組みで同時に読めるように編纂したのは、意味があると思います。

第三次稿と終形を比較しても、第三次稿では、ジョバンニは、まだコンプレックスのかたまりとして描かれています。まず、優等生で気も優しい友人のカンパネルラを過度にうらやんでいます。また、自分はお母さんの病氣で苦労している、父親は密猟者と思われてつらいなどと愚痴をこぼし、また友人にののしられてもじつと我慢している様が強調されています。それを終形では、ぱっさりと削除したり、書き換えています。しかし私は、ジョバンニがコンプレックスの塊であり、「いじめられっ子」のままであつてよいのではないかと思つています。むしろ、このあたりを削除しない方がよいのではないかと思つているくらいです。いずれにせよ、ジョバンニの特徴は外の世界にうまく適応できないという点にあります。天沢退二郎は、ジョバンニがしばしば意識不鮮明な入眠状態にあるのではないかと分析していますが<sup>(16)</sup>、銀河鉄道体験をする前の状態として、足が地に着かないような、現実感がきわめて希薄になつている様が描かれているのは確かです。一方、エルヴアルはもともと精神的に不安定状態にあつたから、違う意味で異常体験をする状態にあつたわけです。

「他界への旅」という幻想は、いわば人間にとつて原型的といつてよい深いヴィジョンです。それは、臨死状態でも経験されますが、精神的に追いつめられた極度の緊張状態とか、現実感が希薄になつたときにも起つる状態であるかと思います。こうして、意識と無意識の垣根が低くなつた状態、つまりいわゆる意識水準の低下が起つたときに、潜在意識・無意識の世界に我々は投げこまれるのであります。

\* \* \*

ふたつの幻想には、それ以外に注目すべき点があります。そのひとつとして、「対」のモチーフがあるということです。賢治では、当然ジョバンニとカンパネラの対があります。ここで、少し話をずらして、「地獄下り」、あるいは「他界への旅」では、しばしば道連れがついているということを指摘しておきます。例えば、ローマの叙事詩であるヴィルギリウスの『エウヘニオ』では、英雄アエニーアスは予言者スイピュルラとともになわけで、「地獄下り」をします。ダンテは、先輩格のヴィルギリウスとともになわけで、「地獄下り」をします。「地獄下り」という異常な体験は、宗教的、あるいはシャーマニズムの習俗ではイニシエーションと見なすことができます。また、心理学的には、無意識の世界への旅と考えられます。そうした心の旅は、失敗すると現実の世界に戻れない、つまりトランス状態に陥つたまま正気にもどれないという大きな危険をともないます。そこで、仏教的には、あるいはシャーマニズム的には導師が、心理学的には熟練したカウンセラーが、つまりイニシエイターが必要になります。

では、カンパネラはジョバンニのイニシエイターかというの、そうとは思われません。ジョバンニのイニシエイターは、第三次稿に登場するブルカニロ博士ですが、これについてはあとで述べます。

ジョバンニ・カンパネラの「対」は別の意味をもつていて、その種の伝承では、双子の片割れが死んでゆき、もうひとりは地上に残されて、死んだ片割れの魂に守られて、大事業を成

就するという筋書きがあります。例えば、ローマの建設神話にある、ロムルスとレムスの双子の例がそうであつて、兄弟の葛藤の中でレムスが殺されて、ロムルスがローマを建国したと伝承が伝えています。「銀河鉄道の夜」はこのような、対の一人の死という筋書きをくり返しています。オットー・ランクによると、これは都市の建設や大工事の際の生け贋の習俗の神話化であるといいます。<sup>(2)</sup>

私の考えでは、カンパネルラはじつはジョバンニの分身ではないかということです。分身といつても、ジョバンニがなれない理想的な人間像ですから、「あるべき自分」つまりユンクのいう「自己」です。「自己」というのは、意識と無意識を統合する精神を安定させる芯のようなもので、禅が追求する悟りの境地でもあります。カムパネルラをジョバンニの分身と考えると、カムパネルラという理想的な自己が魂となつて天上にゆき、ジョバンニは地上に戻つて地上の闇とたたかうという筋書きが浮かんできます。

では、ネルヴァルの方はどうかといいますと、「オーレリア」では、すでにのべたように主人公がもうひとりの自分をその目で見ています。そればかりか、一番目の「地獄下りの」の幻想では、自分そつくりの分身が自分の恋人のオーレリアと結婚しようとし、自分に対して攻撃をくわえきます。

そのような分身は、自分の潜在意識にひそんでいる悪い分身であつて、深層心理学的には「影」ということになりますが、ここは心理学を講じているわけではありませんから、とにかく自分の心の影の部分、反社会的な部分とおおざつぱに思つて下さい。人は心の統合がなされていなままに、反社会的な部分を抑圧すると押しつぶされたゴムまりのようになつて、それがかえつて反動する力を増すといわれています。それが集団的な無意識のレベルに広がつたものが、ヨーロッパの悪魔幻想などいわれていますが、ネルヴァルの幻想はそれを超えて、ゾロアスター教的な善と悪の神話にまでさかのぼつてゆきます。<sup>(2)</sup>

しかし私は、『オーレリア』には別の「対」があることを強調したいと思います。その「対」の存在は、物語の最後に出でできます。第一部では、主人公はまたも精神異常の発作を起こして病院で治療を受けています。そこでひとりの患者に出会います。

そのときまで自分の感情とか苦悩の輪のなかに身をゆだねていた私は、スフィンクスのようにこの世の生の最後の扉に座している、無口で忍耐強い、なんとも表現しがたいひとりの人物に出会つていて。この人が不幸で打ち捨てられているのを見て、私は彼を愛しはじめた。この同情と哀れみから、自分が立ち直るのを感じた。私には、彼が死と生のあいだにあって、ことばでは伝えられない、表現しえない魂の秘密を聞くようにあらかじめ運命づけられた崇高なる通訳者、聽罪司祭のように思われた。(第二部 第六章)

この男に出会つてから、主人公は急に心が落ち着きます。そして、とてもきれいな夢を見るようになります。イシスというオリエントの女神が魂を導くように現れ、主人公の魂の放浪と悩みと罪の意識が終わりを告げたように見えます。しかし、この第一部が発表されたときには、すでにネルヴァルは他界へ旅立つてしまっていたのです。ここに現れる男も、私にはネルヴァルにとつての理想的な分身、つまり「自己」としか思えません。そして、彼こそ主人公、あるいはネルヴァルを靈界に導くイニシエイターであるうと思います。つまり、『オーレリア』には、影としての「分身」と「自己」としての「分身」の両方が現れているのです。

\* \* \*

『オーレリア』と『銀河鉄道の夜』に共通するもうひとつ重要な場面があります。それは、主人公が見る神秘的な

ヴィジョンです。『オーレリア』では、はじめの幻想の最後に出てきます。そこでは、主人公の伯父がこの世にはふつう理解されているような意味での虚無といいうものはない、物質も精神も一体であり滅びることはない、そして、「われわれの過去と未来は密接に結びついている。われわれの一族はわれわれの中に生きている」と語ると、主人公はつぎのような幻視を見ます。

この考えは私にすぐさま感じ取られるものとなつた。そして、まるで広間の壁<sup>(23)</sup>が果てしない眺望に向かって開かれたように、男と女の途切れなくつながつた一本の鎖が見えるようと思われ、その中に私があり、その人の鎖が私自身であつた。あらゆる人々の衣装とあらゆる国のイメージが同時にくつきりと現れた。<sup>(24)</sup>（第一部、第四章）

このヴィジョンは、『銀河鉄道の夜』の第二次稿に現れるブルカニロ博士の言葉とそのあとに見るジョバンニのヴィジョンを思い起させるものです。

ブルカニロ博士は第三次稿まで現れる存在で、物語の最後で、銀河鉄道に乗る幻想は、この博士がジョバンニに対しておこなつた催眠術の実験であることがわかります。博士は彼に催眠術の実験をして、報酬に金貨一枚をあたえ、教訓を残して彼を町に帰します。しかし賢治は、終形で博士の存在を削除してしまいます。これは、賢治の中にあるジョバンニ像の発展から必然的に生じた削除であり、これによってジョバンニは、自らの力で銀河体験をして、自らの力で世の中の闇とたたかう決意をする、この講義を聽講されている千葉一幹さんの言い方を借りれば、自分の力で問いかける存在として、自立したわけです。そのようなことが分かるのも、『銀河鉄道の夜』の四段階の書き直しを同時に読むことによつて分かることなのです。

さて、ここで博士がいうことをまとめることはむずかしいのですが、博士は眞の勉強と実験をすれば、化学も信仰も同じになり、ほんとうの神というのも分かつてくるかも知れない。辞典の内で紀元前二千二百年前の地理と歴史が書いてある頁と二千年前の頁をくらべると、書いてあることはちがつてきている、しかし、それはそう感じるだけだともいいます。そのようにジョバンニにいったのち博士が指をおろすと、引用にあるように、ジョバンニは「自分の考といふものが、汽車や学者や天の川やみんないつしょにぽかつと光つていいんとなくなつてぽかつとともにつてまたなくなつてそしてその一つがぽかつとともにあらゆる広い世界ががらんとひらけあらゆる歴史がそなわりすつと消えるもうがらんとしただもうそれつきりになつていまふのを見ました」とあります。これはふしきなヴィジョンですが、しきりに、ぽかつとともにとか、がらんと、がらんと繰り返していますから、般若心教にある有名な「色即是空、空即是色」つまりこの世のすべての实体は空であり、だからこそ空は实体であつて、色や形をもつて現れる」という虚無と存在を統合する仏教的な認識のヴィジョン、西欧哲学でいう現象学的な認識だと理解せざるをえません。だから、ここにあるのは、もちろんニヒリズムではなく、世界のむなしさを悟つた上で生きることの肯定だと思われます。そして、このあとでジョバンニは、「まづくらな地平線の向こうから青白いのろしが丸でひるまのやうにうちあげられる」さまを見て、「ああマジエランの星雲だ。さあもうきつと僕は僕のために、僕のお母さんのために、カムパネルラのためにみんなのためにほんたうのほんたうの幸福をさがすぞ」という決意の言葉をはきます。つまり、ネルヴァルでは、伯父によつて世界にはいわゆる虚無がないといわれたあと、世界と人間の一体となる愛のきずなのヴィジョンを見ています。つまりそこでは、虚無が否定されています。西欧的認識論で虚無が主役として登場するのはサルトルなどの実存主義からとよくいわれますが、それでも、無は存在の否定としての無であつて、本源的な無を前提としているわけではありません。一方、東洋の仏教的な認識論では「色即是空」という言説で虚

実が統合されているわけで、賢治はそれをヴィジョンによって表現したわけです。とはいっても世界の神秘的なヴィジョンという点では共通しています。そして、二人ともに、地上でのきずなと責任に目覚めます。このように、「他界への旅」という心の深層の旅では、個人をこえた共同幻想、あるいは人類的な集合的無意識のヴィジョンが見えてきて、そこから絆の中で生きる意志に目覚めるのです。こうして、「他界への旅」というイニシエーションが完成するわけです。賢治もネルヴァルも、それをブッキシューな知識からではなく自分のヴィジョンとして見る力があり、自分のことばとして表現できたのだと思います。

\* \* \*

ここで、今日のメインテーマである他界への移行のモチーフに移ります。その場面の描写はじつに特異なものです。

私は地球をつらぬく深淵に落下しているのだと思いこんだ。溶解した金属の流れに苦痛も覚えずに運ばれているのを感じていた。さまざまな色合いから異なった化学的な成分で成り立っているとわかるこれら金属の無数の流れが、人の脳葉のあいだを蛇行する動脈や静脈のように、地球の胎内を縦横に走っていた。すべてが、このように流れ、循環し、振動していた。そして私は、これらの流れが分子状の生きている靈魂の集まりであり、ただ私を運ぶ流れが速いために見分けられないだけだという感覚をもつた。ひとすじの白っぽい光が徐々にその導管に差しこんできて、ついに、大きな円天井のように新たな地平がひろがって、光り輝く波が取り巻くいくつもの島が姿をあらわすのが見えた。

まず、「地球をつらぬく深淵に落下しているのだと思いつこんだ」とあります、ここには地球の中を貫く穴を落下

しているという感覚があり、そのトンネルが人の脳葉のあいだを蛇行する動脈や静脈のように地球の胎内を縦横に走つていて、すべてが、流れ、循環し、振動し、一方、「分子状になつた生きている靈魂の集まりだ」という感覚をもつた」と表現しています。つまり、地球という天体のマクロの世界と脳髄の内部というミクロの世界が混合したイメージで描かれています。ネルヴァルの「他界への旅」の原型にダンテの『神曲』があることは確実ですが、ここでは、マクロとミクロのイメージを一体として、まるでシュールリアリズムのイメージを開拓しています。これが近代人ネルヴァルの他界への移行のヴィジョンであり、それが臨死体験の「トンネル現象」に対応することはすでに述べたとおりですが、同時に、近代人にとって、「他界」がいかに遠くに離れてしまつたかという表現でもあります。それに対して、賢治ではどうでありますか。

ジョバンニが銀河鉄道に移行する場面はつぎのようになります。

そのまま黒な、松や檜の林をこえると、俄にがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘つてゐるのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねさうか野ざくの花がそこらいちめんに、夢の中から薰りだしたといふやうに咲き、鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめた草に投げました。<sup>(2)</sup>

「」にあるように、「天気輪」の下で体を投げ出して、空を見上げていると、「天気輪」が灼いたばかりの青い鋼の板のようにな三角標となつて、すきつと空に立ちます。すると、銀河ステーションという声が聞こえてきて、彼は汽車の車内にいるのです。ここに出てくる「天気輪」は、その名で実在するものがないということもあって、長年賢治

研究家にとつて謎であり、さまざまな解釈が試みられてきました。その代表的なものは、①世界樹、②太陽柱、③五輪塔、④後生車、といったものです。

①の「世界樹」は、古代人によつて想像されたもので、世界を貫く巨大な木があるという空想から生まれたものです。②の「太陽柱」は気象現象のひとつで、寒いとき空中にできる細かな氷の粒が太陽の光を反射してできる光の柱のことです。その記述と絵が掲載されているエクスナーの『気象学』<sup>(3)</sup>が賢治も足を運んだ可能性のある盛岡の気象台にあることから、根本順吉が力説しているものです。

つぎに、③の「後生車」説があります。これは多くの人が連想しているものですが、私も、日本の土俗的想像力の世界では、裏山が異界に通ずる場所であるということから、この説を重視しています。

それには、まず日本における裏山の異界幻想についてのべなければなりません。私は、この話をするときに、かならず宮家準『宗教民俗学』にある図式を紹介することにしています（図2）。それによると、村人にとって、村の境をこえると野山・里山がつらなり、そこは狐や狸や猿などの動物が活躍する世界です。さらに進むと奥山があり、そこは山男や山姥や鬼など人間と魔物の中間的な者が住んでいます。その奥に入ると、天狗、天女などといった超自然の存在がいるというのが、宮家準が描き出した日本の村の裏山の構造です。

一方、仏教的な他界觀がそれに加わったものがいわゆる「山上他界觀」です。つまり、地獄も極楽も山の中にあるという古来の民衆の信仰に『日本靈異記』や源信の『往生要集』などに描かれるような仏教的他界のイメージが重なり、日本特有の他界幻想がうまれたといえます。

堀一郎の『万葉集にあらわれた葬儀制と他界觀、靈魂觀について』によると、『万葉集』の時代の日本人もこうした山上他界を共有していたことがわかります。<sup>(2)</sup> 堀一郎は、「山上他界」を歌つたものが四十七例、「天上他界」が二十

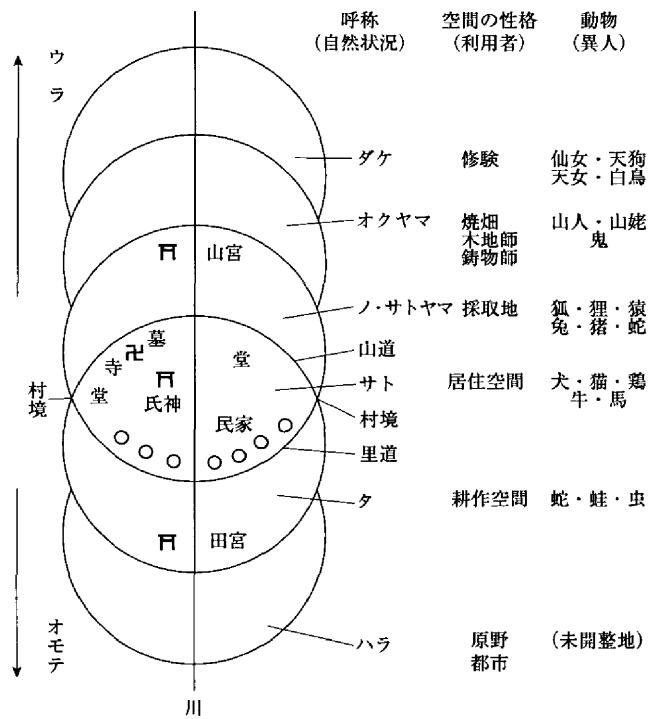


図2 共同体の原風景（宮家準『宗教民族学』326頁、東大出版会、1990）

三例、「海上他界」が二十二、「地下他界」が七例あるとしています。こうしてみると、万葉の時代から「山上他界」の信仰が日本人に特に多いということが判ります。

これは、日本では村の裏山に墓地がもうけられたことと関係があるといわれていますが、そうした地理的な配置の前に、むしろ死者の靈は山にゆくといふ信仰がまずあつたということを考える必要があろうかと思います。このように、地獄も極楽も、天上や地下にあるのではなく、じつは裏山にあるといふのが、日本の農民の想像力の世界なのです。その舞台装置で雪山遭難の臨死体験を語ったのが、『銀河鉄道の

夜』と双子の関係にある賢治の『ひかりの素足』ですが、今日はそれにコメントしません。

「後生車」というのは、「廻願車」とも「地蔵車」ともいわれ、日本の寺の境内にしばしば見られる石造りの石塔で、

その柱のまんなかをくり抜いて、石の輪がはめられ、参詣者は念仏を唱えて、それを回してお賽錢を上げるものです。柳田国男は、この祈りは主として幼子を失った親が幼子の靈のために祈るものであるとしています。<sup>(32)</sup> しかし、さらにその祈りを特定している人もいます。例えば佐藤米司は、「葬送儀礼の民俗」で、「水死とか事故死などの異常の死に方の場合にたてられていることが多いようである」といつています。これは、『銀河鉄道の夜』の内容からすると、たいへんに大事なことです。というのは、ジョバンニが乗ることになる汽車にはカンパネルラという彼の友人が乗っていて、物語の最後に、カンパネルラがザネリという川に溺れそうになつたクラスメイトを助けて、自分は死んでしまつたということが明らかにされるからです。さらに、汽車には「タイタニック号」の遭難で死んだ兄妹と家庭教師も乗っています。

このように水死をした子どもの供養のために「後生車」があることは、現在の日本ではほとんど忘れ去られているのが現状ですが、賢治の時代にはまだその信仰は生きていたはずであり、私は賢治がそれをふまえたうえで、「天気輪」に「後生車」のイメージをこめていると思います。その「天気輪」が裏山にそびえて、それを媒介に主人公が死者を靈界に運ぶ汽車に乗りこむというのは、裏山が他界につづいているという日本のフォークロア的空间とぴったり重なるのです。

しかし賢治は、どうしてこのような日本の伝統的なイメージを原型にしながら、「天気輪」という一見気象学的なネーミングをしたのでしょうか。しかし、ここには物語全体にかかる深層のイメージがかくされていることを指摘したいと思います。

まず、「天」の語には、当然物語の舞台たる「天の川」が含まれている。そして、「氣」には、乗物の汽車の「汽」のつくりの一部が含まれています。また、「輪」は汽車の車輪に通じます。

この「輪」はもつとも鍵になる言葉であり、イメージです。というのは、ここには、「後生車」あるいは「廻願車」という伝統的な願掛けの「車」が含まれていると同時に、もつと広大な仏教的な意味がこめられているからです。仏典で「法輪」というのは仏の教えを示し、また「法輪」をまわすことによって、仏の境地に、極楽浄土に近づくことを示しているからです。法華經の化城喻品第七に、「唯、願わくば世尊よ、法輪を回したまえ」とある言葉がその意味です。<sup>(34)</sup> インドの方にゆくと大きな石の輪が彫られていますが、それが「法輪」の具体的なイメージです。

しかし、物語の表層では、賢治がこよなく愛した汽車の車輪と結びついています。つまり、ここには、汽車という近代科学から生まれた乗物がかさねられているのです。

そして、この汽車と車輪のイメージは、物語のはじめから、何度も繰り返されています。

まず第三章では、カンパネラの家で玩具の汽車が走るのをジョバンニが見て、目を丸くしたことを回想する場面があります。第四章では、家から出ると電燈の光で動いている自分の影が映ると、「ぼくは立派な機関車だ。」<sup>(35)</sup> ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す<sup>(36)</sup> といつて、汽車のように走り出します。第五章でも、天氣輪のそびえ立つ丘の上から下を走る汽車をながめるシーンがあります。<sup>(37)</sup> 第七章では、銀河鉄道に乗ったあと白鳥駅でカンパネラと途中下車すると、二人の影が四方からの光を受けて車軸のようになつて映る場面があります。<sup>(38)</sup> この繰り返しは、きわめて意識的です。それを確認した上で、また「天氣輪」に戻り、「天氣輪」に「後生車」のイメージがこめられているとすると、塔にはめられて車がそのまま汽車の車輪になつていることがわかります。その意味で、つぎの瞬間にジョバンニが汽車の車輪の上の車室に乗っている場面になるのは、イメージの上からいふと、飛躍ではなくて連続的なつながりがあるのです。

」のように車輪としての「輪」がくり返されるのは、「後生車」で車輪をまわして祈願するのと同じと思われます。

これは、他界で往生するための祈りであり、呪文であろうといえ思われます。そもそも、大乗仏教とはいわば大きな乗物の仏教という意味で、すべての人間が大きな乗り物に乗つて往生されるという乗物のイメージをもつてゐるのをいふやと思ふ出せねばなりません。

宗教と科学の統合こそが賢治が一生かけてはたそくとした夢ですが、その理想が、この「輪」のなかにもじめられてゐるのです。この物語には、宗教的な描写はこゝれに使われていません。すべて、汽車とその沿線の風景、それも星の世界を走るところの天文学的な世界が、そくした用語をちりばめられて描写されてゐるのです。しかもそれによつて、じつは宗教思想と宗教的な世界が展開されてゆくのです。銀河沿いに鉄道が走るといへば星的な幻想の深層には、宗教的な思想がひらぬけてゐるのです。

\* \* \*

ソリヤ、天氣輪」の英訳・仏訳の例を紹介します。

イ、*Milky Way Railroad*, translated and adapted from the Japanese by Joseph Sigrist and D. M. Stroud. Stone Bridge Press, Berkeley, 1996 ——"the pole"

ロ、*Night on the Milky Way Train*, translated by Roger Pulvers. Chikuma Shobō, 1996  
——"the weather station pillar"

ハ、*Night Train to the Stars and other stories*, translated by John Bester. Kōdansha International, 1987  
——"the weather pole"

ワ、*Train de nuit dans la voie lactée*, traduit du japonais par Hélène Morita. Intertextes Editeur, 1991

——“le pilier de cycle des éléments”

（）では紹介するだけにとどめますが、いずれも、天氣輪の重層的な意味を理解した訳ではなく、だいたい、柱という訳語を取つていて、輪のイメージは訳されていません。仏訳は五輪塔のイメージの訳語を取つていますが、これにも車輪のイメージはありません。という意味で、たいへん不満であるわけですが、ただ、賢治の訳が世界中に広がることを望むのみで、訳者にこれ以上を望むのは無理というものでしょう。

汽車や車輪が宗教的な象徴をもつてているとすれば、車内で検札にきたときにジョバンニのポケットに入っていた切符はどうでしょうか。ここでも、賢治はじつに日常的な場面を設定しています。というのは、今とはちがい、少し前までは検札といふのは汽車につきものであり、不正乗車の客には恐怖的であるわけですが、ジョバンニも切符を買った記憶がありませんから、困ってしまいます。ところが不思議なことに、ポケットから切符が出てきます。ただ、ふつうの切符ではなくて、「四つに折つたはがきくらいの大きさの緑いろの紙」<sup>(2)</sup>で、中をのぞきこむと、「唐草模様の中に、をかしな十ばかりの字を印刷したもの」なのです。そして、それを持つていれば、どこにでもゆけるという切符です。まず、十ばかりの字とは何であろうかということは当然賢治研究家の探求的で、西田良子は、これは法華経にある十如是ではないかといっています。十如是とは、相、性、体、力、作、因、縁、果、報、本末究竟といった、世界にはたらいているヴェクトルのようなものです。私としては、どこにでもゆける切符といわれていて、切符とは場所の移動への保証ですから、仏界、菩薩界、縁覚界、声聞界、天界、人界、阿修羅界、畜生界、餓鬼界、地獄界といふ十界を示していると思つています。どこにでもゆける切符というのにも、深い意味があるようと思われます。ひとつには、極楽浄土との地上を往復して人々を救う菩薩のようになれるという意味で、これも西田良子が指摘して

いる通りです。<sup>(39)</sup>同時に、もつと卑近なこととしては、ジョバンニにとつて片道切符では地上に戻れないことになります。そこで、他の乗客とちがう切符をもつていていることになりますが、それによつてジョバンニは、現実から逃れることはできない、地上に戻つて、地上の闇と戦わねばならないという運命を示し、ここで臨死体験のコア現象を思い出しますと、「他界からの帰還」の象徴となります。この切符はまた、第三次稿では、ブルカニロ博士が、「さあ、切符をしつかり持つておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまつすぐ歩いて行かなければならない」といつて、催眠術に協力した謝礼として金貨を包む紙にも使われますから、多義的な意味合いをもつてゐるわけです。この金貨が貨幣としての意味ではないとは千葉一幹の解釈ですが<sup>(40)</sup>、私も、これは、しばしば昔話に登場する金のイメージのもつ象徴と同様に、精神的な価値の獲得を象徴しているととらえていました。

しかし、その多義的な意味合いのひとつとして、私がこれを取り上げるときにいつも強調することがあります。それは、この切符がジョバンニが知らないうちにポケットにはいっていたことです。この設定から、私はどうしても「衣裏繫珠」の挿話を思い出します。これも法華経に出てくる有名な仏教説話です。<sup>(41)</sup>あるとき、働かないで金持ちの友人のもとでご馳走を食わせてもらつて暮らしているというぐうたらがいたところ、その友人が所用のため遠くに旅をして長い間居なくなるということが起きたのです。そこで困つたのはこの居候で、たよる人は他にいなくて、浮浪者のようになつていたところに、友人が帰つて来ます。そして、路上でのたれ死にをしそうになつてゐる彼を見て、「お前は馬鹿だなあ。こういうことにならないように、お前の衣の裏に珠、つまり宝石を縫い込んでおいたじやないか。それを売れば、食べるのに困らないようにしておいたのだ」といいます。これはもろんたとえ話で、どんな人も自分の内に宝物を持っている。ただそれに気づかないだけで、それに気づけばその人には、すばらしい人生が開けてくるのだという意味です。むろん、仏教的には宝物とは仏の教えですが、これは隠れた才能かも知れないし、かく

れた知恵かも知れないし、潜在的な力かも知れません。賢治が、ポケットから出てくる切符でこの説話をこめていることは、ほぼ確実だと私は思っています。

\* \* \*

ところで、すでにのべたように、汽車には「タイタニック号」で遭難しているイギリス人の子どもも乗っています。そして、「南十字星」駅では賛美歌も鳴りひびいてきます。つまり、キリスト教の信者も車内にいるのです。一方、ジョバンニとカムパネルラはイタリア的な名前で、これは日本の風土を普遍化するために外国の固有名詞をもちこむという賢治が當時用いる方法からきているものですが、ふたりの心の原型は日本の子どものそれです。すると、ここには、仏教徒とキリスト教徒が同乗していることになります。そこで、「タイタニック号」の子どもたちは「南十字星駅」で降りて、おそらくキリスト教の天国に向かうことになることが暗示されています。しかし、その前に、日本との子どもとキリスト教の子どものあいだに一種の宗教論争があり、相互に自分の神がほんとうの神だといってゆづらず、それは決着がつかない今まで終わります。

おそらく、賢治はアジアとヨーロッパの宗教の統合の可能性という深遠で根本的な問題を、この物語で考えていたのではないでしょうか。とにかくこの物語には、二つの宗教的なイメージの混在と統合があります。

それには、キリスト教にとって、天国はどのような空間にあるとされていたかを考えねばなりません。ネルヴァルの他界への旅は、地球の内部に落ち込む夢想で成り立っていますから、キリスト教の典型的昇天ではありません。キリスト教では、天国は天上有りますから、救われた魂は天上有ります。それは、垂直的な移動です。

ただし、キリスト教以前のオリエント・ヨーロッパの古層にある想像力の世界では、天国は天上有るものではなく、古代の「ギルガメッシュ叙事詩」にあるように、水平的な移動で到達できる場所であったようです。それは、田

<sup>(43)</sup>

中仁彦の『ケルト神話と中世叙事詩』をお読みになるとわかります。それによると、ケルト神話では他界は海の果てにあつたようで、これは極楽淨土を西方の海の果てに見てゐる中世日本の他界幻想と同じです。そこに、キリスト教がはいりこんでくると、天国は空の上にあるということになるわけです。『メルドウーンの航海』などの物語詩ではその中間の形態があつて、ケルトとキリスト教の他界イメージがまじりて中間的になつてゐるそうです。これはまるで、『銀河鉄道の夜』の世界です。というのは、銀河鉄道という幻想の基本的な特徴は、水平と垂直の統合といふところにあるからです。銀河に沿つて走るイメージは水平的ですが、大空はわれわれの頭上にあります。その空に昇る垂直のイメージはまさにそびえ立つ「天氣輪」によつて表現されています。しかし、その「天氣輪」は町の丘の上に、つまり裏山にあつて、この空間は日本の伝統的な異空間へいたる入口なのです。その意味では、他の賢治童話と同様に、日本的事界のトボスがここには見られるといつてよいにもかかわらず、見事に賢治の想像力は天に飛翔しています。こうして賢治は、アジアとヨーロッパを統合するユニークな幻想を生み出したといえます。

私は、賢治が生きながらえていれば、賢治はさらに物語に手を加えたのはまちがいない、つまり、賢治の頭脳のなかでは『銀河鉄道の夜』は永遠に書きなおされる物語であるうと思つています。そして、無数にくり返されるその書き直しの過程で、科学と宗教、アジアとヨーロッパの宗教は、より完全に統合されてゆくのであろうというのが、私の夢想です。

## [注]

(1) 本論述は、平成十六年三月六日に本校で行われた最終講義の内容をまとめたものである。

(2) Raymond A. Moody, Jr. *Life after life*, Stackpole Books, 1975

ハイヤン・A・ムードリー著、中山善之訳『からむ見た死後の世界』(詳論社、一九七七年)

- (3) 立花隆「臨死体験、上ト」、文芸春秋社、一九九四年
- (4) 前掲書、上巻(161)―111頁より
- (5) 肉体からの分離／自体幻視(三十七ペーセント) (6) メンネル現象(111ペーセント)
- (7) バノラマ現象(十二ペーセント) (8) 光との出会い(十六ペーセント)
- (9) 死者との出会い(八ペーセント) (10) 帰れとの合図 (11) 肉体への復帰(西ペーセント)
- \*かっこ内の頻度はケネス・リングの調査による。但し(5)と(7)の項は讀者の補足
- (5) 吉本隆明「死の位相学」、第四章「銀河鉄道の夜」にみる死後の世界、潮出版社、一九八五年
- (6) りの説は、「オーラリア」の第11章に、「うなじにあるといわれてゐる「アラヘアの穴」という魂が抜ける穴に主人公がトルコ石をあてて、スカラホーでいる場面があるといふからもしてさう。
- Nerval: *Œuvre, Aurélia, Bibliothèque de la Péiade*, p. 365, Gallimard, 1974
- (7) プルーストのネルヴァル発見を詳細にした研究は、井上究一郎「マルセイユ・プルーストの作品の構造」(河出書房新社、昭和三十七年)がある。
- なお、「失われた時を求ぬい」にも、ネルヴァルを意識した押語がいくつも見られるが、その例として、第一巻の「スワン家のほうへ」の終わりで、スワンが見る夢に自分が現れる場面で、「ある種の小説家たちのように」と複数として立ちてゐるとして明らかにネルヴァルを念頭にして立てる下りがある。(M. Proust: *A la recherche du temps perdu*, p. 303, Quatre Gallimard, 1999)
- (8) Aristide Marie: *Gérard de Nerval, le poète, l'homme*, Hachette, 1914
- (9) Albert Béguin: *L'Ame romantique et le rêve*, J. Corti, 1939
- Georges Poulet: *Trois essais de mythologie romantique*, J. Corti, 1966
- (10) Nerval: *Œuvre, Aurélia, Bibliothèque de la Péiade*, p. 259, Gallimard, 1974
- (11) 私市保彦『文學物語の文法』筑摩文庫、一九九七年
- (12) Nerval: Op. cit. pp. 366-367
- (13) Ibid. p. 367
- (14) Ibid. p. 368
- (15) Ibid. p. 412

- (16) Ibid. p. 414
- (17) 菅原千恵子「宮澤賢治の青春——“ただ一人の友、保坂嘉内”をめぐって」、宝島社、一九九四年
- (18) 西田良子「銀河鉄道の夜」を読む、創元社、一〇〇三年
- (19) 天澤退一郎「エッセー・オニリック」、第三部「銀河鉄道の夜」、思潮社、一九八七年
- (20) Otto Rank: *Don Juan et le double, études psychanalytiques*, traduit par S. Lautman, Payot, 1973
- (21) Nerval: Op. cit. pp. 381
- (22) Ibid. pp. 407-408
- (23) Ibid. pp. 368
- (24) Ibid. pp. 368
- (25) 千葉一幹「賢治を探せ」一九五頁、講談社選書メチエ、一〇〇三年
- (26) 「宮澤賢治全集」第十卷、本文編、一七五頁、筑摩書房、一九九五年
- (27) 前掲書、一七五～一七六頁
- (28) Nerval: Op. cit. pp. 366
- (29) 「宮澤賢治全集」第十一卷、本文編、一一〇～一一四頁
- (30) 根本順吉「十代」昭和八年三月号、
- (31) 「別冊太陽—宮澤賢治『銀河鉄道の夜』」一一〇～一一二頁、一九八五年、五〇号
- (32) 堀一郎「万葉集にあらわれた葬制と他界觀、靈魂觀について」(『万葉集大成八〔民俗編〕』平凡社、一九五三年)
- (33) 柳田國男「赤子塚の話」
- (34) 佐藤米司「葬送儀礼の民俗」、岩崎美術社、一九七一年
- (35) 法華經・化城喻品第七
- (36) 「銀河鉄道の夜」天氣輪
- (37) 「宮澤賢治全集」第十一卷、本文編、一一〇頁
- (38) 前掲書、一二四頁
- (39) 西田良子「宮澤賢治論」、一一（四）、桜楓社、昭和五十六年、

(40) 前掲書、一一(五)  
(41) 千葉一幹 前掲書、一九三一—一九五頁  
(42) 「法華經」五百弟子受記品第八  
(43) 田中仁彦「ケルト神話と中世騎士物語——「他界」へ旅と冒險」、中公新書、一九九五年

(1100五年一月二十一日 受理)